茨城県土浦市

谷原門遺跡Ｃ地点
発掘調査報告書

－倉庫新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

１９９９年

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

茨城県土浦市

谷原門（やわらかど）遺跡Ｃ地点
発掘調査報告書

－倉庫新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

１９９９年

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため市内には貝塚、古墳、集落跡など数多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な任務であり、郷土の発展のためにも重要なことと思われます。

このたびの調査は、飯田悦子氏の行う倉庫新築工事に伴い、周知の遺跡である谷原門遺跡Ｃ地点発掘調査による記録保存を目的として行われたものであります。

遺跡内からは、今から約1,100年前の平安時代の竪穴住居跡などが確認されました。この調査によって、中地区の古代文化の究明にいささかなりとも役立てていただければ幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の発刊にあたり、関係者の皆様方のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼を申し上げます。

平成１１年１０月

土浦市教育委員会
教育長　尾　見　彰　一

例　　言

1　本書は、飯田悦子氏の倉庫新築工事事業に伴う、土浦市大字中字猫内734-1外に所在する谷原門遺跡Ｃ地点の発掘調査報告書である。

2　調査は飯田悦子氏の委託を受け土浦市遺跡調査会が実施した。

3　調査期間は1993（平成５）年６月29日から７月12日である。調査面積はおよそ120㎡である。

4　発掘調査は関口　満　石川　功が担当し、遺物整理および本書の作成は福田礼子が担当した。

5　本書の執筆は、第１・６章を関口、第５章を石川、遺物観察表を黒田友紀、他は福田が行った。

6　整理作業分担は下記のとおりである。
遺物図版作成を黒澤春彦、遺構図版作成を福田・黒田、写真撮影を関口が行った。

7　本調査及び報告書作成にあたっては下記の方々にご協力・ご指導頂いた。記して感謝の意を表したい。
赤井博之　茨城県教育委員会　茨城県県南教育事務所

8　本遺跡出土資料は上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。

凡　　例

1　遺構番号は現地調査同様のものである。

2　土層観察における色相の判断は「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社）を使用した。

3　遺構図中のピット脇の数値は床面からの深さを示す。

4　遺構・遺物の縮尺は下記の通りである。
住居跡－１／60・１／30　土坑－１／40　遺物－１／３

5　遺物出土状況図中の●は遺物を表し、実線は接合関係を示す。

6　実測図中の標高はすべて海抜高を表し、ｍ単位で示してある。

7　本文・表中の（）は現存値、〔〕は推定値を示す。

8　遺構図中の破線は推定線を示している。

9　土器断面図の黒塗りは須恵器を表現している。

10　出土遺物図版の遺物№と観察表中の№、そして写真図版の№は符合する。

11　観察表中の法量におけるアルファベットは、下記の意味で使用した。
Ａ口径、Ｂ底径、Ｃ器高、Ｄ高台径、Ｅ高台高、Ｆつまみ径、Ｇつまみ高

目　　次

序
例言・凡例
目次
第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　遺跡概観 …… 2
第３章　確認調査及び基本層序 …… 6
第４章　検出された遺構と遺物 …… 9
第５章　掘り方（床下）の調査 …… １７
第６章　まとめ …… １９
抄　録 …… ２０
写真図版

図版目次

第１図　周辺の遺跡位置図 …… 3
第２図　トレンチ設定図 …… 7
第３図　遺構確認状況 …… 8
第４図　基本層序 …… 8
第５図　第１号住居跡・カマド …… １０
第６図　第１号住居跡遺物出土状況・掘り方 …… １１
第７図　第１号住居跡出土遺物（１） …… １２
第８図　第１号住居跡出土遺物（２） …… １３
第９図　第１号住居跡出土遺物（３） …… １４
第10図　第１号土坑 …… １６

表　目　次

表１　周辺の遺跡一覧 …… 4
表２　第１号住居跡出土遺物観察表 …… １５

写真図版目次

ＰＬ１　第１号住居跡完掘状況、同遺物出土状況
ＰＬ２　同貼り床下掘り方、同カマド周辺遺物出土状況
ＰＬ３　基本層序、遺構確認状況、第１号土坑完掘状況
ＰＬ４　第１号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ５　第１号住居跡出土遺物（２）

第１章　調査に至る経緯

平成５年１月11日に飯田悦子氏より、土浦市開発行為指導要綱に基づく事前協議申請書が提出された。その内容は約1,550㎡の市街化区域の土地において、倉庫新築工事事業を行なうという趣旨のものであった。このことを受け土浦市教育委員会では、遺跡台帳との照合及び現地踏査を行った。申請地は谷頭及び谷部からなり、谷部の大半は埋め土され平坦になっていた。しかしながら、西側には市道を挟んで谷原門遺跡Ｃ地点が存在した。このような状況から、申請地には埋蔵文化財の存在する可能性があるため、事業主宛てに埋蔵文化財の確認調査の協力要請を行った。

確認調査は平成５年６月14日に実施した。申請地に３本のトレンチを設定し調査した。この結果、谷頭部分のトレンチから竪穴住居跡が１軒確認された。他の谷部のトレンチでは遺構・遺物は確認されなかった。この調査で発見された埋蔵文化財は、周知の遺跡である谷原門遺跡Ｃ地点の一部として扱った。

土浦市教育委員会では、確認調査の状況をまとめ事業主宛に「申請地で現状変更を行う場合は、埋蔵文化財の発掘調査が必要となる」旨を報告した。

この後事業主と市教育委員会との間で、埋蔵文化財の取扱についての協議を重ねた。申請地の竪穴住居跡が発見された場所は、工事計画によると盛土工事がなされ、その上に倉庫が建築される予定であった。この計画において、遺跡の上に恒久的な建物が建てられることから、発掘調査により埋蔵文化財の記録保存を行うことで合意した。

発掘調査は、土浦市教育委員会が土浦市遺跡調査会に依頼し実施した。

調査経過

平成５年	６月29日	器材の搬入。テント設営と遺構確認。
	７月１日	第１号竪穴住居跡の北西側に新たにトレンチを設定すると、土坑が１基確認された。第１号竪穴住居跡の掘り下げ開始。
	７月６日	第１号竪穴住居跡・カマドの土層写真撮影。
	７月８日	第１号竪穴住居跡の遺物出土状況・完掘状況写真撮影。
	７月９日	第１号竪穴住居跡床下の調査及び土坑の調査。
	７月12日	調査終了。器材の撤収。

第２章　遺跡概観（第１図）

本遺跡は土浦市大字中字猫内734－１外の地番に所在する。土浦市は北に関東平野を見渡す筑波山、東に霞ヶ浦を望んでいる。土浦市の地形は市内のほぼ中央を流れる桜川により形成される低地部、筑波山塊より南東に延びる新治台地、桜川南側の筑波稲敷台地の三者よりなる。この筑波稲敷台地の北側には北西より花室川が霞ヶ浦に向かい流れており、河川沿岸の台地両側は開析が進み、多くの谷戸と小規模な台地が複雑に形成されている。

本遺跡はこの花室川右岸に近接し、両側を谷戸に挟まれ、南西側に狭い谷が侵入する小規模な独立丘上にあり、谷に面した台地南側の端部に位置している。標高は約25mである。

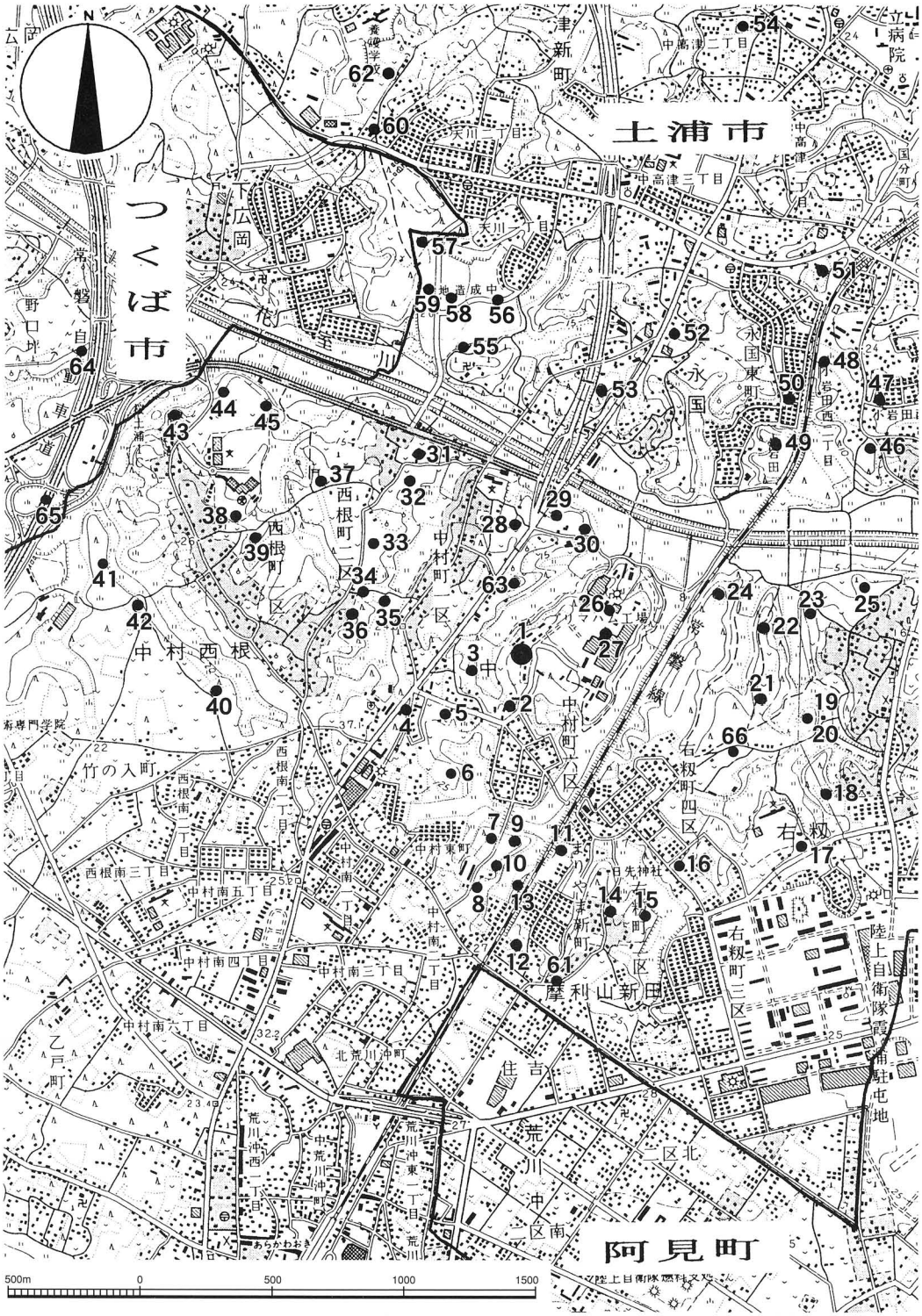
花室川流域は広範囲の台地と霞ヶ浦に隣接し、山海の恵みを多く享受できる環境であったことであろう。

先土器時代は、本遺跡と同一台地上に位置する右岸の向原遺跡（26）から立川ローム軟質部よりユニットが検出されている。ユニット中からは安山岩製のナイフ形石器、メノウ製の石核、黒曜石の剥片多数が出土している。同様に右岸の宮前遺跡（15）からは黒曜石製の削器と安山岩製の尖頭器、宮脇遺跡（37）からは安山岩製のスクレイパーと思われる石器が出土した。

縄文時代になると早期の陥し穴が向原遺跡、宮前遺跡から検出されている。特に向原遺跡では陥し穴19基が直線的に配列していた。内路地台遺跡（21）では炉穴が８基検出されている。前期になると住居跡が確認されている。右籾貝塚東遺跡（16）、向原遺跡で黒浜式期の住居跡が各１軒、権現前遺跡（14）では浮島式期の住居跡が１軒検出されている。また後稲遺跡（44）からは土器片が採集されている。中期になると遺跡数は増大し、宮前遺跡、扇ノ台遺跡（６）、下広岡遺跡（65）で加曽利Ｅ式期の集落が報告されている。特筆すべきは下広岡遺跡から出土したパン状炭化物であろう。権現前遺跡では加曽利Ｅ式期の住居跡が１軒発見されている。谷原門遺跡Ａ地点（２）、峰崎遺跡Ａ地点（11）、内路地台遺跡、笹崎遺跡（41）、石橋台遺跡（42）、花室川左岸のビヤ首遺跡（51）、からは加曽利Ｅ式の土器片が採集されている。後期から晩期にかけて遺跡数は減少傾向となり、峰崎遺跡Ａ地点、花室川左岸の宮久保遺跡（49）、権現前遺跡から土器片が採集されるにすぎない。

続く弥生時代も人々の痕跡は希薄であり、後期に入って左岸の永国遺跡（50）、和台遺跡（52）で集落が、また右岸の中根遺跡（66）からは終末期～古墳時代前期にかけての住居跡が１軒検出されるにとどまる。

古墳時代に入ると向原遺跡、永国遺跡などから前期から後期にかけての大集落が発見されている。また、右岸の宮前遺跡、念代遺跡（23）、中新台遺跡（38）、南達中Ａ遺跡（63）、左岸の寺家ノ後遺跡（55）、十三塚Ｂ遺跡（58）からも住居跡が発見されており、遺跡の増加傾向が窺える。古墳は左岸の馬道古墳群から箱式石棺が発見されたとあり（註）、南達中Ａ遺跡からは埴輪



第１図　周辺の遺跡位置図（国土地理院発行 1/25,000 に加筆）

表１　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	先土器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世	No.	遺跡名	先土器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
1	谷原門遺跡Ｃ		○			○			34	大日古墳				○			
2	谷原門遺跡Ａ		○		○	○			35	浅間古墳				○			
3	谷原門遺跡Ｂ					○			36	白樂所在塚							
4	嵩久保一里塚							○	37	宮脇	○			○	○		
5	天神					○			38	中新台				○	○		
6	扇ノ台		○			○			39	堂場台					○		
7	木の宮北		○						40	竹ノ入		○					
8	木の宮南遺跡Ａ		○	○					41	笹崎		○					
9	木の宮南遺跡Ｃ		○						42	石橋台		○					
10	小西		○			○			43	二又		○		○	○		
11	峰崎遺跡Ａ		○						44	後稲		○			○		
12	峰崎遺跡Ｂ西		○						45	不動堂古墳群				○			
13	峰崎遺跡Ｃ		○			○			46	いさろ				○			
14	権現前		○			○			47	油麦田				○	○		
15	宮前	○	○		○		○		48	阿ら地				○	○		
16	右籾貝塚東		○						49	宮久保		○			○		
17	宮塚		○						50	永国		○	○	○	○		
18	小谷					○			51	ビヤ首		○					
19	右籾三区庚申塚							○	52	和台		○	○	○			
20	右籾館跡						○	○	53	亀井				○	○		
21	内路地台		○			○			54	西原				○	○		
22	牧の内					○	○		55	寺家ノ後				○			○
23	念代				○	○	○		56	寺家ノ後古墳群				○			
24	右籾十三塚					○			57	十三塚Ａ						○	○
25	平坪				○	○			58	十三塚Ｂ				○		○	○
26	向原	○	○		○				59	永国十三塚						○	○
27	向原古墳群				○				60	宮脇庚申塚		○					○
28	南達中遺跡Ｂ				○	○			61	摩利山新田庚申塚							○
29	馬道				○	○	○		62	宮脇Ｂ		○			○	○	
30	馬道古墳群				○				63	南達中Ａ				○			
31	平				○	○			64	下大角豆		○	○				
32	諏訪					○			65	下広岡		○		○			
33	平代地		○			○			66	中根			○	○			

片が多数発見されている。大日古墳（34）は円墳もしくは方墳、浅間古墳（35）、不動堂古墳群（45）は円墳で、寺家ノ後古墳群（56）からは終末期方墳が４基発見されている。

奈良・平安時代に入ると古墳時代より続く永国遺跡で住居跡が多数検出されている。内路地台遺跡からは平安時代の住居跡２軒、火葬墓２基、念代遺跡では奈良・平安時代の住居跡が19軒検出された。扇ノ台遺跡からは約50軒の住居跡の他に、約50棟の掘立柱建物跡が検出されている。掘立柱建物跡には規則性が見られ、棟数の多さからも通常の集落とは異なる性格が想定される。また位置図には記していないが、（29）の西側、中村町内の墓地より火葬墓が１基発見されている。遺跡・遺構等の詳細は不明だが、時期は９世紀前葉～中葉に相当し、本遺跡との関連が窺えよう。

中・近世の遺跡としては、右籾館跡（20）や水戸街道の一里塚のひとつである嵩久保一里塚（４）等があげられる。

註　『土浦の遺跡－埋蔵文化財包蔵地－』　p.11

参考文献

1983　『桜村史』（上巻）　桜村教育委員会

1984　『土浦の遺跡－埋蔵文化財包蔵地－』　土浦市教育委員会

1987　『向原遺跡』　向原遺跡調査会　土浦市教育委員会

1989　『嵩久保一里塚』　土浦市教育委員会

1990　『寺家ノ後Ａ遺跡　寺家ノ後Ｂ遺跡　十三塚Ａ遺跡　十三塚遺跡　永国十三塚　旧鎌倉街道』　茨城県教育財団調査報告書　第60集　茨城県教育財団

1991　『西郷遺跡　南丘遺跡　長峰遺跡　数光遺跡　宮塚遺跡　右籾館跡　内路地台遺跡』　茨城県教育財団文化財調査報告書　第64集　茨城県教育財団

1995　吉澤　悟「茨城県における古代火葬墓の地域性」　『土浦市博物館紀要』第６号　土浦市立博物館

1996　『中新台遺跡』　土浦市教育委員会　土浦市遺跡調査会

『右籾貝塚東遺跡　内路地台遺跡　念代遺跡　平坪遺跡』　茨城県教育財団文化財調査報告書　第111集　茨城県教育財団

1997　『宮前遺跡』　茨城県教育財団文化財調査報告　第118集　茨城県教育財団

第３章　確認調査及び基本層序（第２～４図）

今回の開発申請地は、当初「周知の遺跡」には該当していなかった。しかし、道路を挟んで西側に谷原門遺跡Ｃ地点が存在し、開発申請地内にも埋蔵文化財が存在する可能性が考えられたため、確認調査を行った。

確認調査は平成５年６月１４日に行った。開発申請地内は谷頭にあたり、従来凹地をなす地形であったが、現状では谷部が埋め立てられていた。調査は重機を使用し、トレンチを３本設定して行った。南側から第１・２・３トレンチと呼称した。

第１・２トレンチの南端では地表面から深さ約１ｍ以上に渡り、コンクリート片などの瓦礫を含む埋土が見られた。この瓦礫層下には旧表土と考えられる黒色土が南側に傾斜して確認された。黒色土の下層は粘土層であり。トレンチ内に遺物・遺構は確認されなかった。

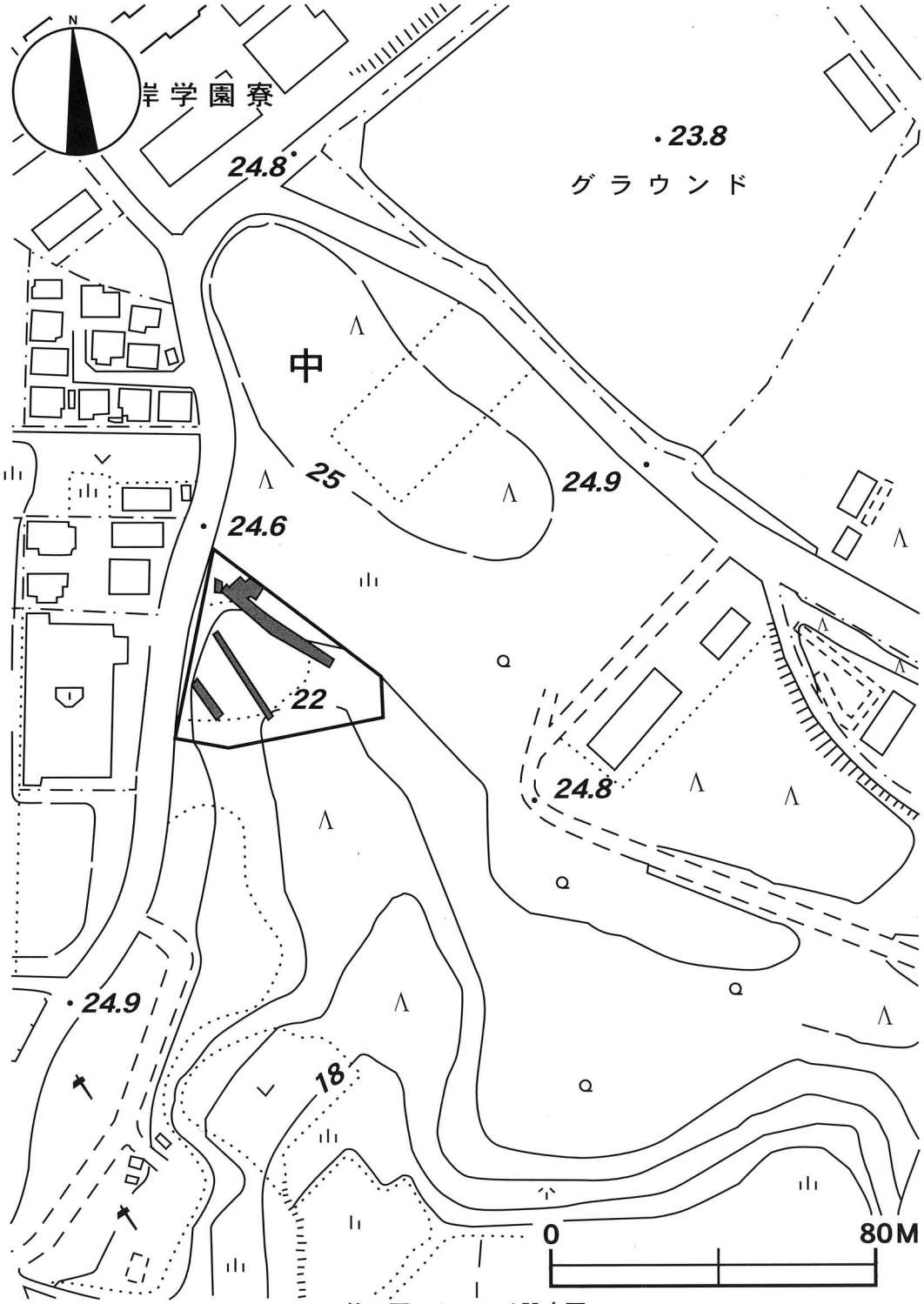
第３トレンチ内では、表土下に関東ローム層が確認され、北端近くで竪穴住居跡の一部が検出された。このためトレンチを拡張して竪穴住居跡の全貌を検出した。

第４トレンチは調査開始時に設定したものであり、関東ローム層を確認面とし、土坑が１基検出された。第４図の基本層序は本トレンチ内の土層堆積状況である。。

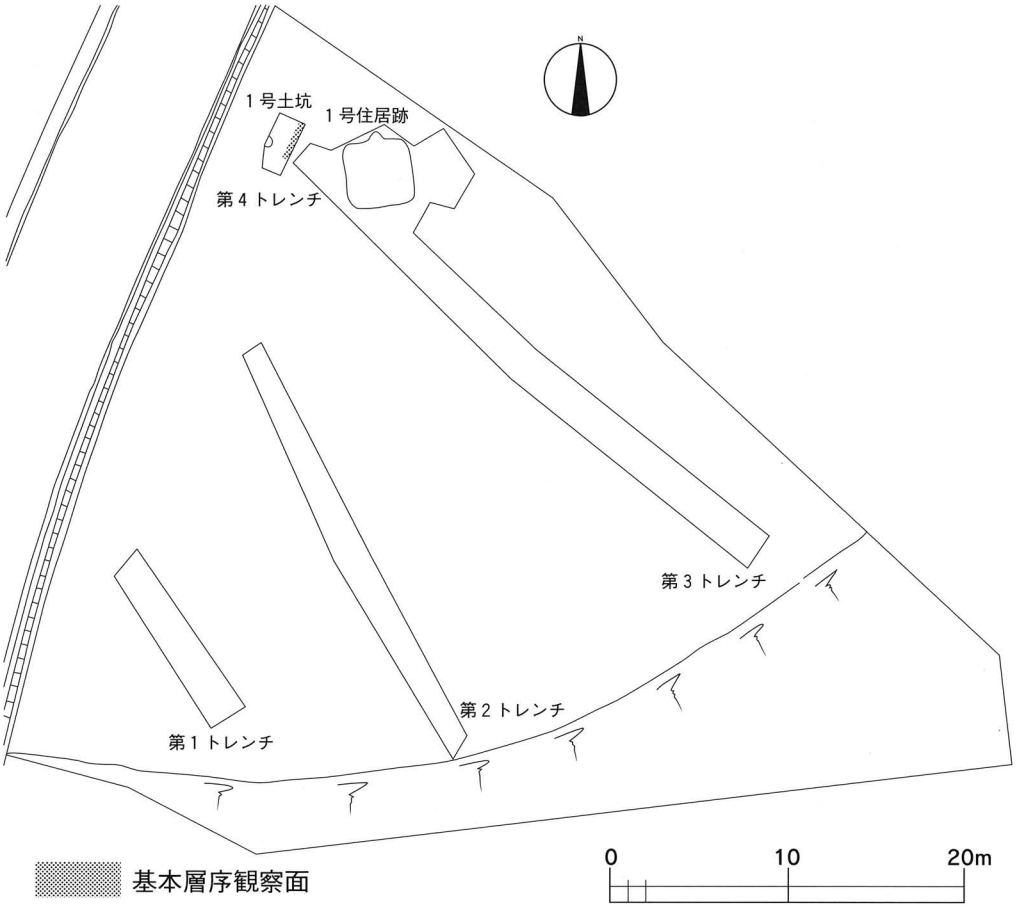
確認調査の結果は、申請地内の南側は凹地となっており、北側は谷頭となっている。この谷頭に竪穴住居跡や土坑が確認された。

先の確認された埋蔵文化財については、谷原門遺跡Ｃ地点の一部として扱った。

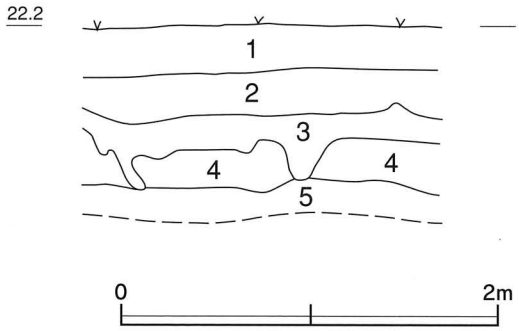
基本層序は、地面から約１ｍ掘り下げて観察した。全層序は５層からなる。第１層は表土で、約25㎝の層厚を持ち、地上に生えた植物の根の混入が多く見られた。第２層は約20㎝の層厚を持ち、表土と同様な色調を呈する。根の混入はあまり見られない。第３層はローム漸移層で、約18㎝の層厚を持ち、部分的に第５層まで達している。第４層はソフトローム層で約20㎝の層厚を持つ。第５層はハードローム層で、層厚は未確認である。それぞれの土層はほぼ水平に堆積している。



第2図　トレンチ設定図



第3図　遺構確認状況



1	7.5YR	3/3	暗褐色	表土
2	7.5YR	3/3	暗褐色	
3	7.5YR	4/6	褐　色	ローム漸移層
4	7.5YR	5/6	明褐色	ソフトローム
5	7.5YR	5/8	明褐色	ハードローム

第4図　基本層序

第４章　検出された遺構と遺物

本遺跡より平安時代の住居跡１軒と時期不明の土坑１基が確認された。調査区は狭い台地平坦面と南側へと続く谷部から成っており、遺構は台地端部にあたる北側に位置している。

第１号住居跡（第５～９図：ＰＬ １・２・４・５）

規模・形状　長径3.87m、短径3.65mの横長の方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは42cmを測る。壁溝は北側のカマド部分を除き全周する。幅は25～30cmで、床面より22cm程掘り込まれていた。南側壁溝はカマドの延長線にあたる部分が幅60cm、長さ45cmの規模で内側に向かい突出していた。

主軸方向　Ｎ－５°－Ｗ

床　ほぼ平坦で住居跡のほぼ中央から東側にかけて貼り床がなされていた。貼り床面を取り除き、住居跡の掘り方面の検出を行なったところ掘り方面は平坦ではなく、住居跡のほぼ中央を境として東側に向けて低くなっていた。掘り方面には東側から南側にかけて不整形のピットが６ヵ所掘り込まれていた。規模・形状ともに不統一で、深さは7.6～42.9cmである。掘り方覆土はローム質土が主体であった（床下調査の詳細は第５章を参照）。

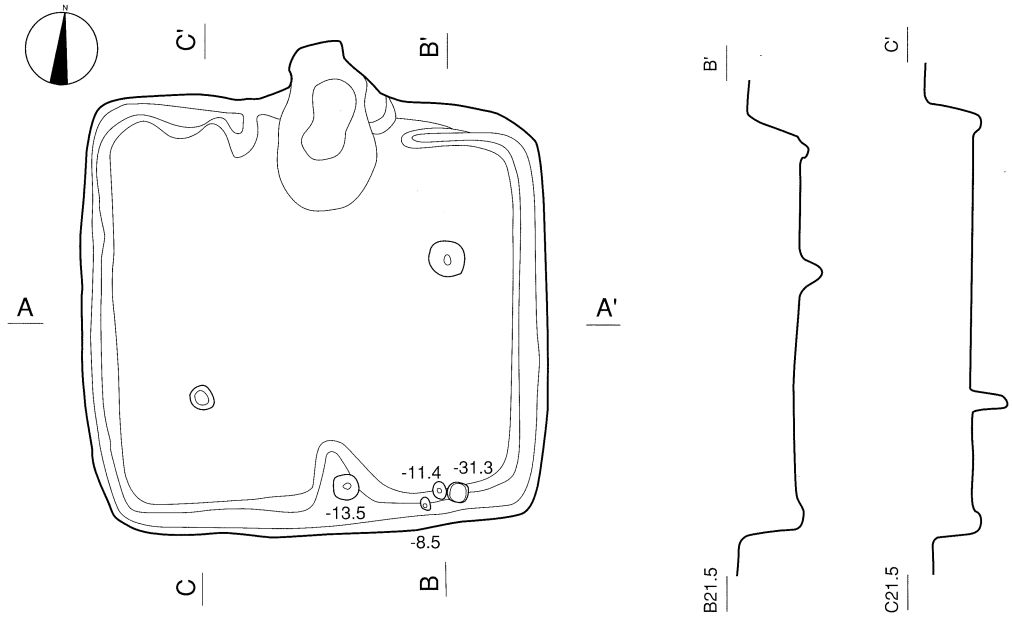
ピット　２ヵ所検出された。北東側と南西側に配置し、円形を基調とする。規模は径20～30cm、深さは8.5～13.6cmを測る。南側の壁溝内には４ヵ所見られた。円形・楕円形を基調とし、規模は径13～22cm、深さは8.5～31.3cmを測る。

カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。全長は1.42mを計り、袖部は右側のみ残存していた。燃焼部は楕円形を呈し、床面より28cm程掘り込まれている。煙道部にかけては緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は15層に分層され、焼土混入土が厚い箇所で20cm程堆積していた。遺物は出土しているが小片のため図化していない。

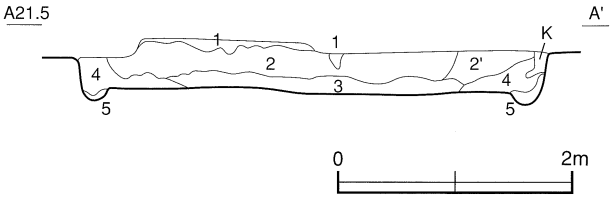
覆土　５層に分層される。壁溝内下部に壁崩れ土が堆積していた。覆土全体に焼土・炭化物が混入している。

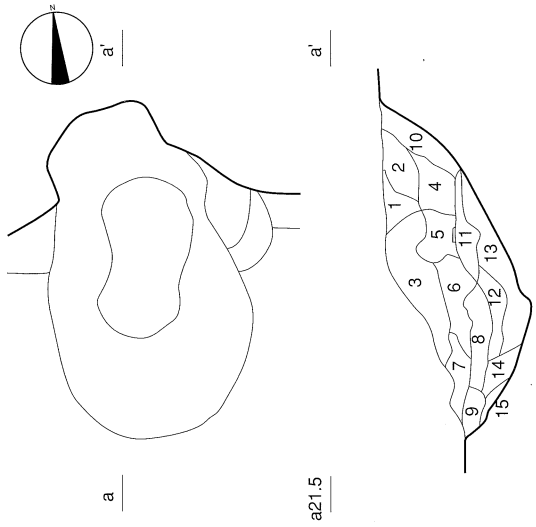
遺物　大半が床面直上～覆土下位より出土している。甕以外は全て須恵器であった。６・９はほぼ完形で出土しており、９は底面に穿孔が見られた。20の砥石は住居跡の南北から出土した接合資料である。また図化はしていないが、覆土中の土師器甕片と床下覆土中の破片が接合している。

所見　カマドの位置より、入り口部は南側と想定される。南側に張り出した周溝、及び壁溝内ピットは入り口部施設に関連する遺構であろう。遺物は出土状況から全て廃棄遺物と思われる。住居跡の時期は出土遺物と大きく隔たらない９世紀前葉に相当しよう。



1	10YR	3/2	黒褐色	焼土小・ローム中～粒少量
2	10YR	3/2	黒褐色	焼土粒微量、炭化物・粒少量、ローム中～粒中量　黄褐色土ブロック状
2′	10YR	3/2	黒褐色	焼土粒少量、炭化物・粒少量、ローム中～粒中量
3	10YR	3/3	暗褐色	焼土粒少量、炭化粒微量、ローム小中量、ローム粒少量
4	10YR	3/3	暗褐色	炭化粒微量、ローム中～粒中量
5	10YR	4/4	褐　色	炭化粒微量、ローム小多量、ローム中・粒中量、ローム大少量



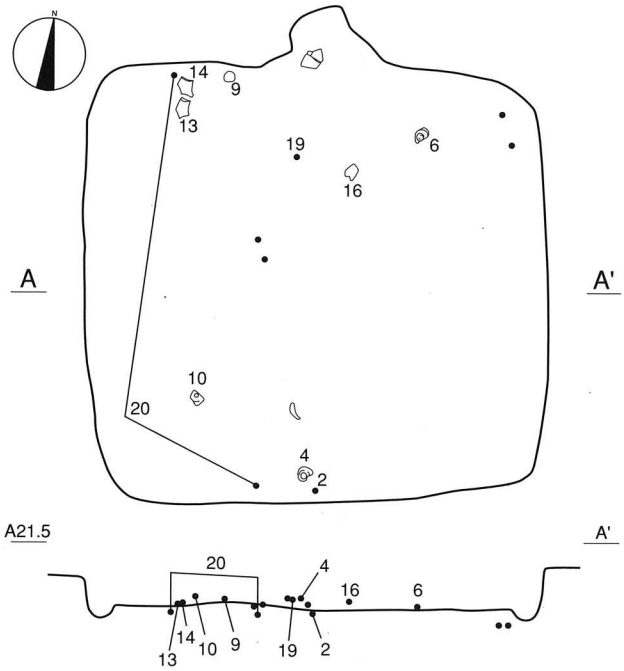


カマド

1	7.5YR	3/1	黒褐色	粘土粒微量
2	7.5YR	3/2	黒褐色	粘土粒微量
3	7.5YR	3/2	黒褐色	焼土粒・炭化粒微量
4	7.5YR	4/2	灰褐色	炭化粒少量、粘土粒微量
5	7.5YR	4/2	灰褐色	焼土粒少量
6	5YR	3/2	暗赤褐色	焼土小・粒中量、炭化粒微量
7	7.5YR	4/2	灰褐色	焼土小・粒多量、焼土中中量、炭化粒少量、粘土粒微量
8	7.5YR	2/1	黒　色	焼土粒・炭化粒少量
9	7.5YR	3/2	黒褐色	焼土小少量、粘土粒微量
10	7.5YR	3/2	黒褐色	焼土粒微量
11	5YR	3/2	暗赤褐色	焼土小・粒少量
12	5YR	3/1	黒褐色	焼土粒・粘土粒微量
13	2.5YR	2/1	極暗赤褐色	焼土小・粒中量
14	7.5YR	3/2	黒褐色	焼土小少量
15	7.5YR	4/3	褐　色	炭化粒中量

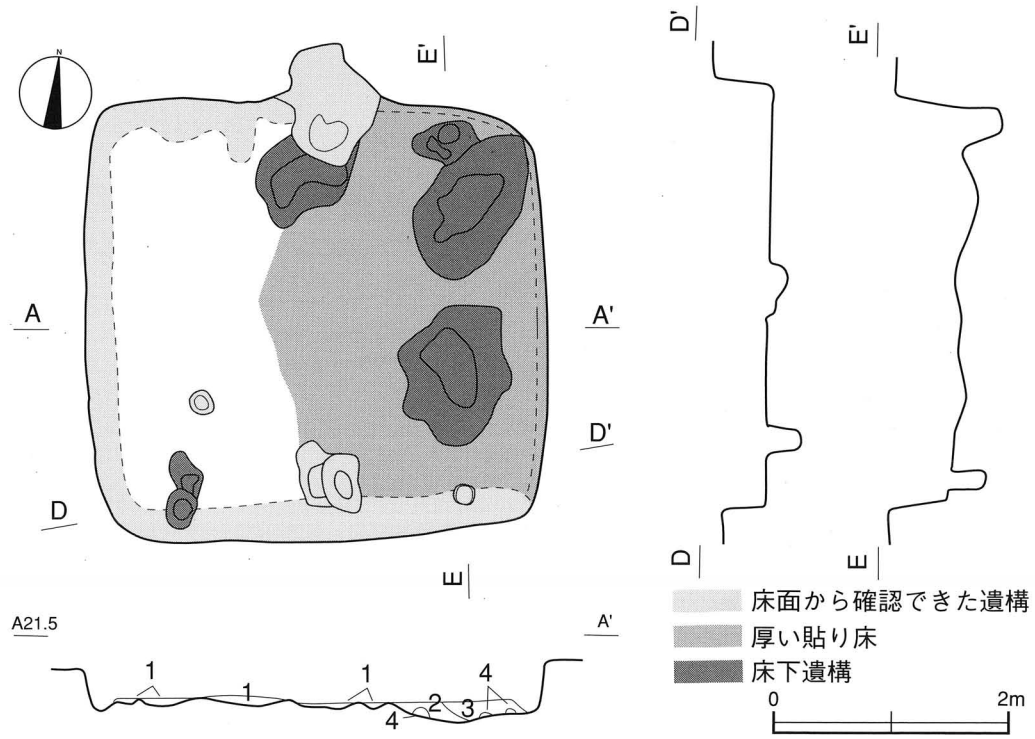
0　1m

第５図　第１号住居跡・カマド

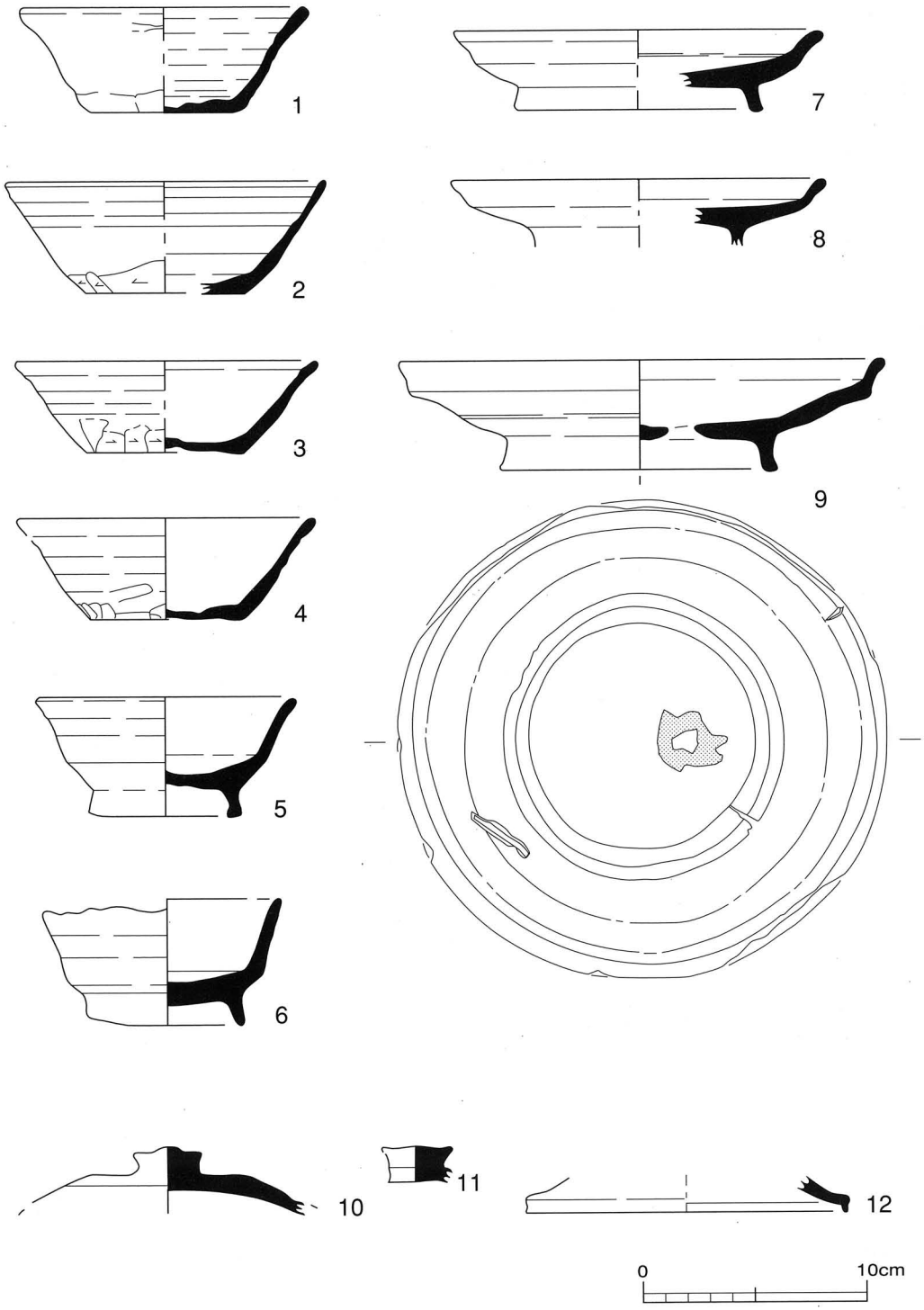


床下

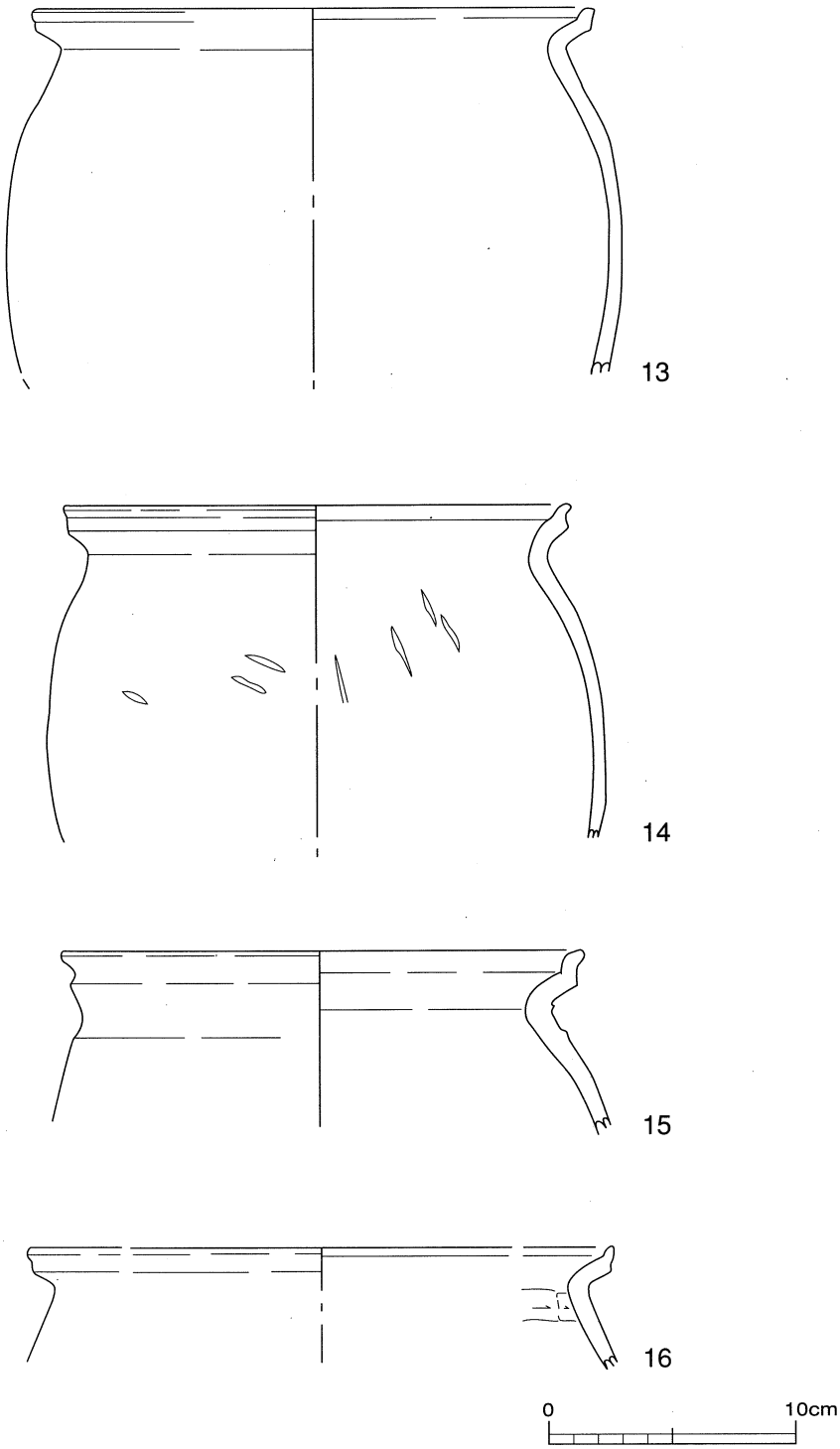
1	7.5YR	5/8	にぶい褐色	ローム小・粒多量、ローム中中量、ローム大少量
2	7.5YR	5/6	褐　色	ローム小・粒中量、ローム大・中少量
3	7.5YR	4/6	褐　色	
4	7.5YR	6/8	褐　色	ロームブロック



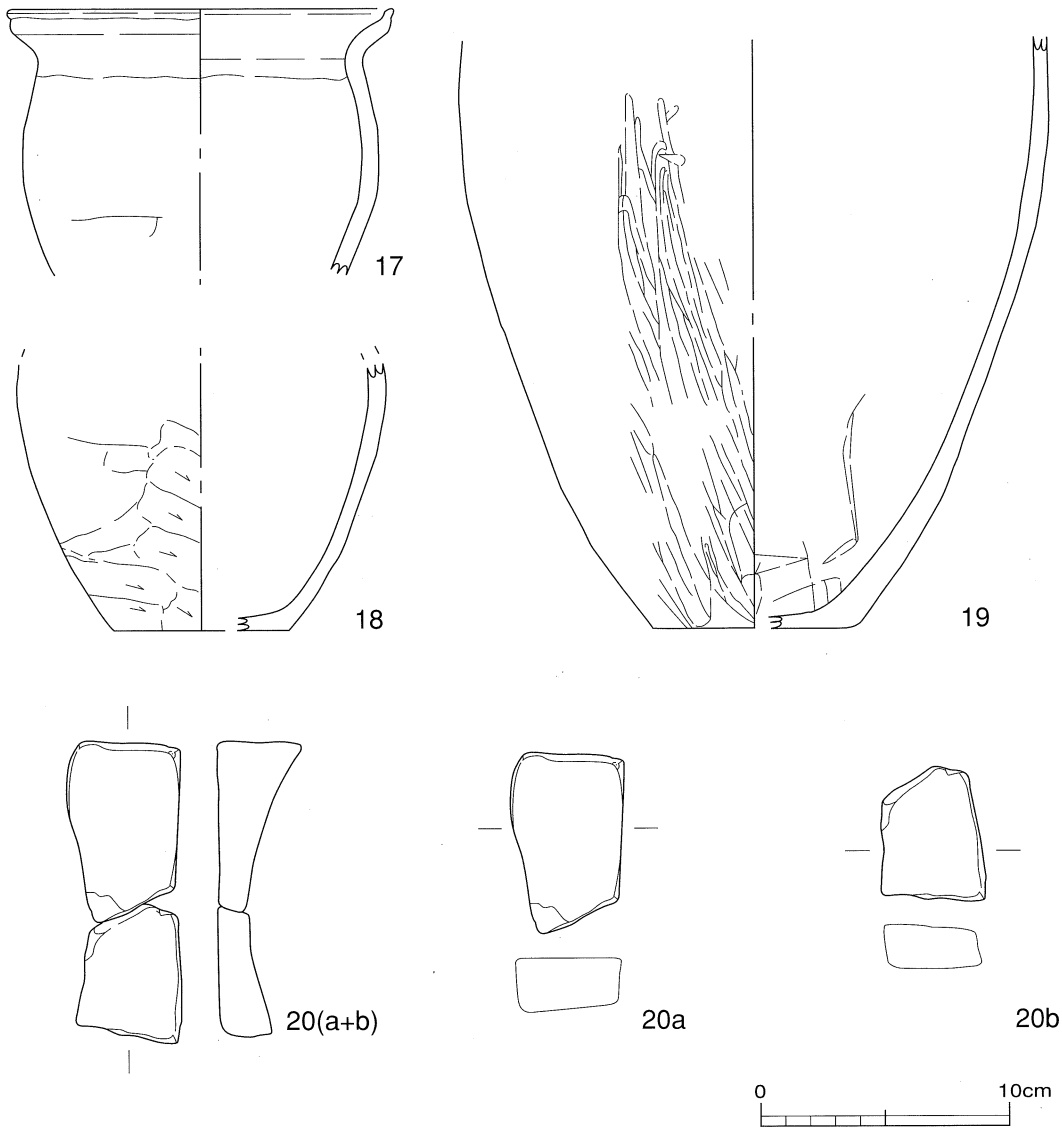
第６図　第１号住居跡遺物出土状況・掘り方



第７図　第１号住居跡出土遺物（1）



第８図　第１号住居跡出土遺物（2）



第９図　第１号住居跡出土遺物（3）

表２　第１号住居跡出土遺物観察表

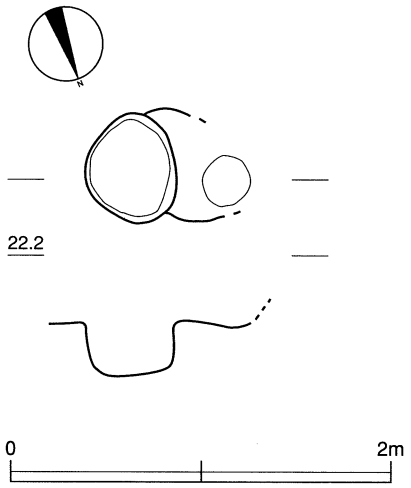
図版番号	器形器種	法量(cm)	残存率	焼成	胎土	色調(外/内)	器形・技法の特徴	備考
1	坏 須恵器	A.〔12.2〕 B.〔 7.2〕 C.　4.7	1/3	不良	１～２㎜の長石・石英粒を少量、雲母片を多量	灰色 にぶい黄色	体部は深めで反りながら立ち上がる。体部外面下位に手持ち篦削り、底部は切り離し後、一方向から篦削りを施す。	焼成悪く、軟質。
2	坏 須恵器	A.〔14.0〕 B.〔 7.2〕 C.　5.0	1/3	良好	１～３㎜の長石・石英粒を多量	灰色 灰色	体部は深めで直線的に立ち上がる。体部外面下位に手持ち篦削り、底部は切り離し後、一方向からの篦削りを施す。	焼成良く、硬質。
3	坏 須恵器	A.〔13.2〕 B.〔 7.0〕 C.　4.1	1/4	良好	１～２㎜の長石・石英粒を中量	灰色 灰色	体部は僅かな丸みをもって立ち上がり、やや外反する口縁部をもつ。体部外面下位に手持ち篦削り、底部は回転篦切り後、一方向からの篦削りを施す。	
4	坏 須恵器	A.〔13.2〕 B.　6.7 C.　4.5	2/3	不良	１～３㎜の長石・石英粒を中量、微細な雲母片を少量	にぶい黄橙色 明黄褐色	直線的に立ち上がる体部をもち、口縁部はやや外反する。体部外面下位に手持ち篦削り、底部は回転篦切り後、一方向からの篦削りを施す。酸化焔焼成に近い色調。	軟質で器面がざらつく。
5	高台付坏 須恵器	A.〔11.6〕 C.　5.2 D.　6.5 E.　1.2	2/3	良好	１～３㎜の長石・石英粒を中量	青灰色 灰色	体部は高台基部からなだらかに開き、角度を変えて反りぎみに強く立ち上がる。高台は「ハ」の字に直線的に開く。底部は回転篦切りを行い、高台取り付けに伴う回転なでを周囲に施す。	焼成良く、硬質。
6	高台付坏 須恵器	A.〔10.4〕 C.　5.6 D.　6.8 E.　1.1	ほぼ完形	不良	１～２㎜の長石・石英粒を少量、雲母片を多量	灰白色 灰白色	体部は高台基部からなだらかに開き、角度を変えてやや反りぎみに強く立ち上がる。高台はやや「ハ」の字に開く。底部は回転篦削りを施し、さらに回転なでを加える。	焼成悪く、軟質。
7	高台付盤 須恵器	A.〔16.2〕 C.　3.6 D.〔11.0〕 E.　1.0	1/4	普通	白色針状物質、チャート小円礫	灰オリーブ色 灰オリーブ色	立ち上がりの緩やかな体部に外反する口縁部がつく。高台は低く「ハ」の字に直線的に開く。底部は切り離し後、回転篦削りを行い、高台取り付け部周辺に回転なでを施す。	木葉下窯跡群産須恵器。
8	高台付盤 須恵器	A.〔16.6〕 C.（ 3.0）	細片	良好	１㎜の長石・石英粒を中量	褐灰色 褐灰色	高台基部からなだらかに開く体部に僅かに外反する口縁部が立ち上がる。底部は切り離し後、回転篦削りを行い、高台取り付け部周辺に回転なでを施す。	焼成良く、硬質。
9	高台付盤 須恵器	A.　21.6 C.　5.0 D.　12.4 E.　1.4	ほぼ完形	良好	２～４㎜の長石・石英粒を多量	灰色 灰白色	大型の高台付盤。浅く大きく開く体部から、外反する口縁部が強く立ち上がる。高台は反りぎみに開く。切り離し後、体部下位から底部にかけて回転篦削りを行い、高台取り付けに伴う回転なでを周囲に施す。	底部穿孔あり。
10	蓋 須恵器	C.（ 3.0） G.　3.0 H.　1.3	2/3	良好	１～２㎜の長石・石英粒を多量	黄灰色 灰色	体部は上位の平坦面からなだらかに開く。体部上位に回転篦削りを施し、つまみ周囲に回転なでを加えている。	焼成良く、硬質。
11	蓋 須恵器	G.　3.1 H.　1.5	つまみ	良好	１～２㎜の長石・石英粒を中量	灰色 灰色	つまみ周囲に回転なでを施している。	焼成良く、硬質。
12	蓋 須恵器	A.〔14.2〕 C.（ 1.6）	細片	良好	微細な長石・石英粒を中量	灰色 灰色	体部端部をほぼ直角に折り曲げ、小さな口唇部をつくる。	焼成良く、硬質。
13	甕 土師器	A.〔22.2〕 C.（14.7）	口縁部1/6	普通	１～２㎜の長石・石英粒を中量、雲母片を少量	橙色 にぶい黄橙色	最大径は体部中央よりやや上にあり、口径より若干大きい。肩部から口縁部にかけては「く」の字に屈曲し外反ぎみに口唇部を立ち上げる。体部外面に横方向の篦なで、内面に斜め方向の篦なでを施す。	外面に煤が付着。
14	甕 土師器	A.〔20.2〕 C.（13.6）	口縁部1/2	普通	１㎜の長石・石英粒を多量	橙色 橙色	最大径は体部中央よりやや上にあり、口径より若干大きい。「ハ」の字に開く口縁部に外反ぎみに口唇部を立ち上げる。外面は斜め方向の篦なで、内面は横方向の篦なでを施す。	
15	甕 土師器	A.　20.6 C.（ 7.1）	1/2	普通	１～３㎜の長石・石英粒、雲母片を多量	にぶい橙色 橙色	肩部から口縁部にかけては「コ」の字状の屈曲を呈し、外反ぎみの口唇部がつく。外面に篦削り後、縦方向の磨きを施す。内面は横方向に篦なでを施す。	外面に煤が付着。
16	甕 土師器	A.〔23.4〕 C.（ 4.6）	口縁部1/6	普通	１～２㎜の長石・石英粒を多量、雲母片を少量	橙色 橙色	肩部から口縁部にかけては「く」の字に屈曲し、ほぼ垂直に口唇部を立ち上げる。外面に篦削り後、縦方向の磨き、口縁部内面に横方向の篦なでを施す。	
17	甕 土師器	A.〔15.2〕 C.（10.7）	口縁部1/4	普通	１～３㎜の長石・石英粒を少量	明赤褐色 褐灰色	体部中位やや上にある最大径よりも口径が若干大きい。口縁部は「ハ」の字状に開き、外反ぎみの口唇部を小さく立ち上げる。体部中位以下に面取りするかのように強い横方向の篦削り、内面に横方向の篦なでを施す。	
18	甕 土師器	B.〔 7.0〕 C.（10.7）	底部1/2	普通	１～２㎜の長石・石英粒を中量	褐色 にぶい黄橙色	体部中位以下に篦削り、内面に横方向の篦なでを施す。	底部に木葉痕。
19	甕 土師器	B.〔 8.0〕 C.（23.7）	底部1/2	不良	１～２㎜の長石・石英粒を中量、雲母を少量	にぶい褐色 にぶい黄橙色	全体的に細長い器形を呈する。外面は体部中位やや上から下位にかけて、縦方向の強い磨き、下位に篦削り後縦方向の磨きが見られる。内面は縦方向の篦なでが見られる。底部は一方向からの篦削りを施す。	
20	砥石 石製品	長さ 12.0 幅　4.6 厚さ　3.4 重さ 171.1g	石材 凝灰岩	－	――	――	砥面は上下端を除く４面。使用により大きく凹んでいる。側面に刃傷あり。接合資料。２個体に割れた後も使用している。	

第１号土坑（第10図：ＰＬ３）

規模・形状　長径（85）cm、短径55cmの瓢状を呈する。東側で深く、西側で浅いテラス状を呈していた。西側は調査区外に延びている。東側は坑底部が平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは27cmを測る。西側は深さ５cm程で緩やかに立ち上がっていた。

遺物　出土していない。

所見　性格・時期ともに詳細は不明である。



第10図　第１号土坑

第５章　掘り方（床下）の調査（第６図）

床面までの調査終了後、本竪穴住居の構築の解明の手がかりを得るため、床面を除去し、竪穴住居跡の掘り方の調査を実施した。その結果、掘り方面では底面が平坦ではなく、西側のやや高い部分から住居跡のほぼ中央を境として、東側に向けて約10センチ程度低くなる状況が確認された（第６図厚い貼り床としたスクリーントーン部分）。また、住居跡の東側床下から1.3×0.8mおよび1.2×0.9m程度の不整形の浅い掘り込みが２ヵ所、また、カマドの前からも0.7×0.6m程度の不整形の浅い掘り込みが確認されたほか、住居跡南西の角近くより0.3×0.3m程度の不整方形のピットが、住居跡北東の角近くより0.5×0.4m程度の不整形のピットが検出された。これらの遺構は本住居跡の構築・構造に伴うものと推定されるが、ローム質土を主体とする貼り床によって埋められていたことから、この住居における生活段階では埋め戻されていたものと推定される。

考察　谷原門遺跡Ｃ地点第１号住居跡の掘り方の特徴について

今回、竪穴住居跡の貼り床を除去し、床下の精査を実施したところ、床面では確認出来なかったいくつかの新たな遺構を確認することが出来た。

これらのうち、まずカマド前および東側において検出された不整形の浅い掘り込みであるが、これらについてはその形状および大きさから考えてみると、貯蔵用の土坑や何らかの施設に伴ったものとは考えにくく、住居跡東側が緩やかに下がっていたこととあわせて竪穴住居構築時の掘り過ぎ部分ではなかったかと考えられる。竪穴住居の構築にあたっては、竪穴住居の壁に沿った部分をやや深めに掘り下げ、住居中央部分は高めに残し、貼り床によって床面を調整するような掘り方をしている例（註１）などもあるが、本住居跡の場合はそのような規則性は認められないことから、構築に伴い床予定面まで概ね平らに掘り下げを行なったものの、床面の調整段階でたまたま深めに掘りすぎていた東側半分と凹み３ヵ所については補正のために貼り床をして埋め戻したものであろうと推定される。

次に南西および北東において検出されたピットであるが、これについては確認された場所および形状から推測すると、本竪穴住居の柱穴であった可能性も想定される。柱穴と仮定した場合、南西のピットについては掘り方が北側に変形していることから、柱の据え直し（または抜き取り）をした可能性も推定されるほか、北東側のピットについても、掘り方がやや大きく不整形であることから同様の可能性がある。ただし、これらのピット上にも貼り床および壁溝が存在していたことから考えると、最終生活面では埋め戻されて機能していなかったことはまちがいない。本住居跡の床面の調査では、確実に柱穴と考えられる遺構が確認されていないことを考えると、建築当初に、竪穴住居の竪穴部端に近い位置に設置されていた柱を、何らかの理由（註２）のためにより外側柱に改築した可能性（註３）も想定される。ただし、この時期の竪穴住居跡ではあまり柱穴が見つからないことが多く、またこのように変則的な柱配置を持つ建て方の類例も確認でき

ないため判断は難しい。なお、本住居跡北西側では床面・床下ともにピットが確認出来なかったことから、この部分の柱は竪穴部より外に設置されていたか、柱の下に柱受け的なものが存在した可能性も考えられるが、いずれとも判断されるような遺構・遺物は発見されなかった。

竪穴住居跡の調査では、床下の掘り方を調査する例はあまり多くないが、今回の調査ではこのように竪穴住居の構築についての問題をいくつか提示することができた。今後の調査事例の増加を期待したい。

註1　県内ではひたちなか市船窪遺跡12号住居跡などにその傾向が窺われる。（稲田健一ほか 1998　『船窪Ⅰ』（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社）

註2　最も考えられる理由は竪穴住居内部の容積を広くするためであろう。

註3　または竪穴住居の施工途中で柱の位置を変更した（柱穴は掘ったものの、実際には建てずに埋め戻した）可能性も考えられるが、いずれにしても判断は難しい。

第6章　まとめ

今回の調査面積は約120㎡という小規模なものであったが、調査エリア内からは竪穴住居跡が1軒と土坑が1基確認された。

竪穴住居跡から出土した遺物は、平安時代の土師器・須恵器が主体を占め、特に土師器は甕のみであり、他は須恵器による器種構成が見られる。

出土須恵器の多くは焼成の良好なものが目立ち、器種は坏・高台付坏・高台付盤・蓋（この他小破片で甕や鉢又は甑）が出土している。甕や鉢又は甑の叩き目は、横方向の平行叩きである。坏の口径：底径の比率はおよそ2：1を示す。高台付盤は口径によって大小2つの法量のものが見られる。蓋は口縁端部が折り返されるものとまっすぐなもの（小破片であり図示していない。）が存在する。№19の土師器甕の胴部下半には全面にヘラ磨きが施されている。上記の特徴を勘案すると、本住居跡から出土している遺物の年代は一定幅を持つ遺物が出土しているが、9世紀前葉に位置付けられよう。

これらの遺物の中で、№7の高台付盤は全体に厚手で、他の高台付盤とは雰囲気が異なる。胎土には白色針状物質やチャートの小円礫が含まれることから、木葉下窯跡群で生産された可能性が考えられる（註）。

また№9の底面には内面から力が加えられた孔が見られる。市内他遺跡での類例として、穿孔部位及び穿孔状況が異なるが、長峰遺跡第9号住居跡出土土師器甕や根鹿北遺跡第7号土坑出土土師器甕がある。その意味については、不慮のものか意図的なものかは不明である。

最後に、本住居跡の床面下には不整形の浅い掘り込みやピットが確認された。これらの遺構は、住居の構築や床下の構造に関わるものと考えられるが、明確ではない。今後竪穴住居跡の調査にあたってはこのような遺構の存在も考慮に入れた調査が望まれよう。

註　赤井博之氏からご教示頂いた。

参考文献

土浦市教育委員会「長峰遺跡　田村･沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集」1997

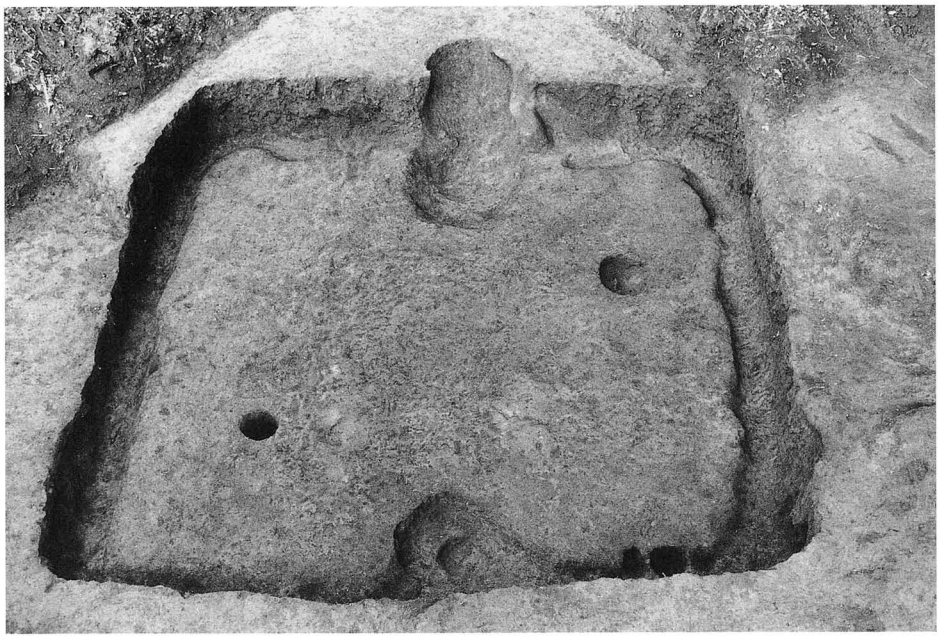
土浦市教育委員会「根鹿北遺跡・栗山窯跡
土浦市今泉霊園拡張工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1998

報告書抄録

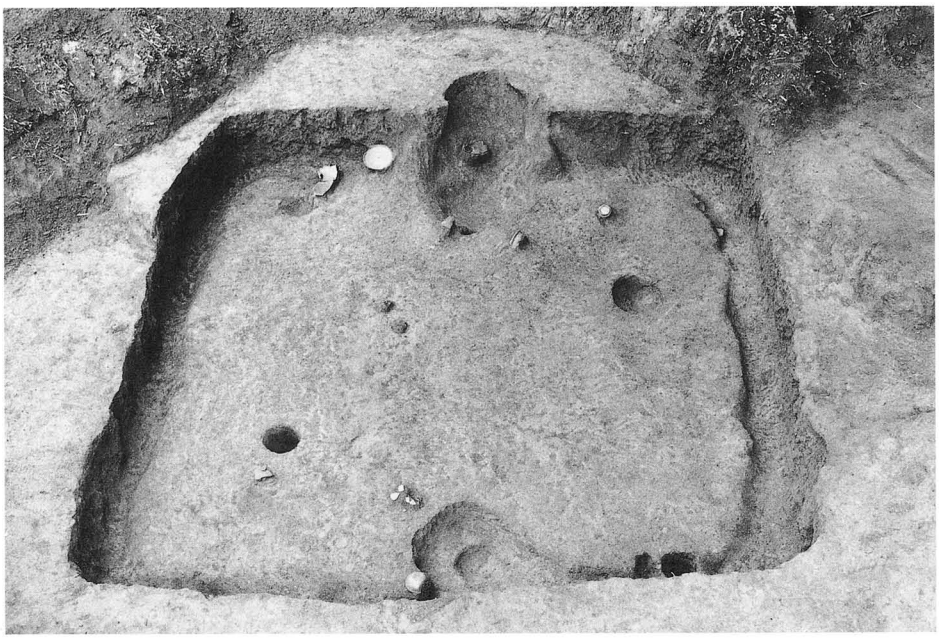
フリガナ	やわらかどいせき しいちてんはっくつちょうさ ほうこくしょ
書名	谷原門遺跡C地点発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
編著者名	福田 礼子　石川 功　関口 満
編集機関	土浦市遺跡調査会　〒300-0812 土浦市下高津2-7-36 土浦市教育委員会内　☎0298 (26) 3484
発行機関	土浦市教育委員会　同上
発行年月日	１９９９年１０月２９日

フリガナ	フリガナ	コード					
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やわらかどいせき 谷原門遺跡C地点	いばらきけんつちうらしおおあざ 茨城県土浦市大字 なかあざねこうち 中字猫内734－1外	08230　A-5	36度 2分 52秒	140度 10分 45秒	平成5年6月29日 ～7月12日	約120m²	倉庫新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
谷原門遺跡C地点	集落跡	平安（9世紀前葉）	竪穴住居跡 土坑	土師器・須恵器	出土須恵器の中に、木葉下窯跡群産須恵器と思われるものがある。



第１号住居跡完掘状況



同　遺物出土状況

ＰＬ２

同　貼り床下掘り方

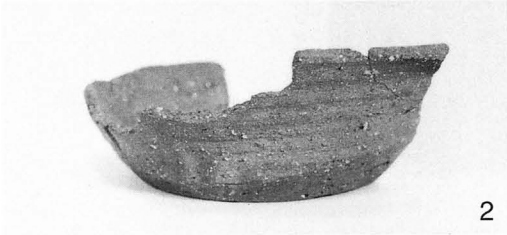
同　カマド周辺遺物出土状況

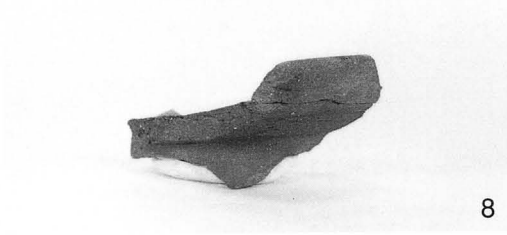
基本層序

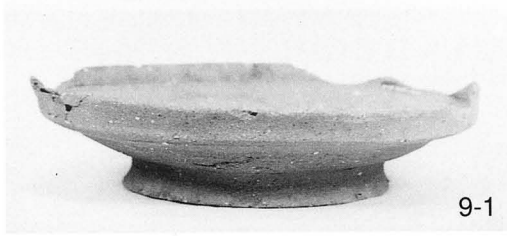
遺構確認状況

第１号土坑完掘状況

ＰＬ４







第１号住居跡出土遺物（1）

13

14

15

16

17

18

19

20

第１号住居跡出土遺物（2）

土浦市遺跡調査会組織（平成５年度）

会　長	須　田　直　之	土浦市文化財保護審議会長
副会長	青　木　利　次	土浦市教育委員会教育長
理　事	大　塚　　博	土浦市文化財保護審議委員
理　事	廣　田　宣　治	土浦市企画課長
理　事	雨　貝　　宏	土浦市建築指導課長
理　事	内海崎　保　生	土浦市耕地課長
理　事	野　口　幹　雄	土浦市区画整理課長
理　事	山　田　和　也	土浦市都市計画課長
理　事	大　塚　重　治	土浦市土木課長
監　事	永　井　　進	土浦市教育委員会教育次長
監　事	飯　田　章　二	土浦市監査事務局長
幹事長	宮　本　　昭	土浦市教育委員会文化課長
幹　事	加倉井　藤　雄	土浦市教育委員会文化課主査
幹　事	塩　谷　　修	土浦市教育委員会文化課主幹兼学芸員
幹　事	石　川　　功	土浦市教育委員会文化課主幹
幹　事	黒　澤　春　彦	土浦市教育委員会文化課主事
幹　事	中　澤　達　也	土浦市教育委員会文化課主事
幹　事	関　口　　満	土浦市教育委員会文化課主事

調査者名簿

（現地調査）

調査担当	関口　満
調　査　員	石川　功
調査作業員	飯田　恵子　飯田ひろ子　川村　俊夫　下村　長司 塚田　まさ

（室内整理作業）

整理作業	福田　礼子　黒澤　春彦　石川　功　関口　満 黒田　友紀
整理参加者	石山　春美　中村　節子　長嶺　道子

谷原門遺跡Ｃ地点

－倉庫新築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－

発　　行　１９９９年１０月２９日
編　　集　土浦市遺跡調査会
問い合わせ先　上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300－0811
茨城県土浦市上高津1843
TEL　0298 (26) 7111
印　　刷　㈱　横　山　印　刷